

明治三十六年「台北役者評判記」(一)

メタデータ	言語: jpn 出版者: 明治大学教養論集刊行会 公開日: 2021-11-29 キーワード (Ja): キーワード (En): 作成者: 日置, 貴之 メールアドレス: 所属:
URL	http://hdl.handle.net/10291/22063

資料紹介 明治三十六年「台北役者評判記」（一）

日置 貴之

〔解説〕

「台北役者評判記」は明治三十六年（一九〇三）一月二十一日から二月十八日まで、日本統治下の台湾における日刊紙である「台湾日日新報」に連載された。今回はその前半を紹介する。

「台北役者評判記」の内容は、当時、台北市内に存在した台北座と榮座に所属する歌舞伎役者に対する評であり、各座から十名ずつ、計二十名の役者を取り上げられている。評は合評形式であり、評者は梅の家、神州、百文字屋、九老人、笹の家、黙庵、手爾波丸、眼兵衛の八人。この面々はいずれも前年に組織された観劇団体・陸連の一員であり、梅の家、手爾波丸、眼兵衛らはこの前後にも『台湾日日新報』紙上で台北座、榮座の公演に評を加えている（明治三十五、六年頃の台北劇界の動向や、陸連については別稿を用意している）。

連載の第一回では、眼兵衛によって台北における劇場の沿革と、評判記連載に至る経緯が語られ、二回目以降には、次の役者たちへの評が掲載された。

嵐彦三郎／阪東竹三郎／中村吉十郎／中村駒右衛門／実川百々蔵／阪東のし蔵／中村駒之丞／中村扇三郎／中村

岡之助／臺家薔花／尾上多賀之丞／嵐雀之丞／実川八百七／片岡扇平／山下三勝／阪東五郎／尾上卯多三郎／片岡我久蔵／市川瀧三郎／市川瀧之助

彼らは、今日の演劇史に名を残した人々とは決して言えない。「原もとの名は多賀次郎、台湾では尾上多賀之丞と名乗なまっているという尾上多賀之丞、阪東（坂東）竹三郎など、襲名の実態が怪しく、今日では代数に数えられない役者もいる。これらの役者に対する評者の態度は時に厳しく、多賀之丞などは初代と比較されてかなり辛辣な評価を受けているのだが、そうした評も含め評者たちの態度は実に楽しげである。

また、一月二十五日掲載の中村駒右衛門評の後には、「好劇翁」なる人物から投書された、前日の中村吉十郎評に対する意見が掲載されており、二月七日には片岡扇平評を掲載する予定を延期して、「好劇生」から寄せられた五日掲載の嵐雀之丞評に対する批判を載せ、続く八日には眼兵衛がこれに応じている。こうした記事からは、内地から海を隔てた台湾（当時は神戸―基隆航路で四日ないし五日を要した）にあつて、時に過去に内地で見た舞台の記憶と重ねつつ、歌舞伎を楽しむ人々の姿が浮かんでくる。先述の多賀之丞らを「偽物」と切り捨てることも、これらの評を無名の芝居好きによる、二流以下の役者に対する言及として無視することも簡単だが、それは当時の歌舞伎が持っていた裾野の広さを見失うことに他ならない。「外地」における歌舞伎受容のあり方を示す興味深い資料として、紹介する次第である。

翻刻にあたっては、「台湾日日新報」記事データベース（漢珍知識網）の画像を底本とした。句読点、振り仮名も含め原本通りとしたが、一部の漢字の字体を改めた。また、明らかな脱字は「」内に補い、誤字は（ママ）とした。

【本文】

明治三十六年(一九〇三)一月二十一日

●台北役者評判記(一)

はしがき 眼兵衛

栄座 台北座

台北に芝居と云ふものが出来たのは随分早い時分である。頃はホンの一時の延張小屋でガタヒシ演つた事もあつたが卅年の冬に西門外街の魚市場の辺に台北座と云ふ一寸小屋らしいものが初めて出来成駒一座愛沢一座杯で打つた事もあつたけれどもまだ其頃は軍政が民政に改つて間も無い時分で名は演劇であるが宛然と田舎の神事に一夜興行する素人芝居同様全で見られたものでは無かつた。其後興行小屋の十字屋が十字館と改め鈍帳にもしろ九州役者を輸入して少しく芝居らしくなり夫れが追々進歩して相当な役者が来る様になり一昨年今の台北座が建築せられた後は双方共一時に面目を改め互ひに競争をして役者を買ひ込み去年一月の初芝居の如きは十字館に紅粉助、瀧三郎(今のとほ別人)吉太郎あり台北座には竹三郎、雷次郎、他之助杯にて時々同一の世界を出して各々得意の腕を磨き湾的好劇家の咽を鳴らせ橋五郎、彦三郎等の来て弥々其価値を上げ台湾の芝居などと余り馬鹿にして呉れるなど威張つた事もあつた。が今から思へば実にお耻しい次第であつた。処が十字館は劇場取締規則の爲めに倒れ暫時は台北座の独舞台であつた。処に栄座と云ふ大劇場が出来し我久蔵、雀之丞、彦三郎等の外に台北座の橋五郎を買収して一採に台北座を圧倒せんと試みたので台北座は之れに反抗し非常な奮発を以て瀧之助を聘んで江戸風の旗幟を翻へし反つて栄座を倒さんとするの氣勢を見せ双方競争の態度となり今春よりは栄座に瀧三郎一派の数名を増して益々上方風の嗜好に客を引かんとすれば台北座は更らに多賀之丞、卯多三郎等を加へて其向ふを張り競争は弥々劇烈となつたと共に劇界の進歩は驚く

可き速度を以て進み之を過去一年の去年の一月と比較すれば恰も丹波ヒヨツボコ谷から一時に都会へ飛び出した様な観がある左れば今春以来の芝居熱と云ふものは台北市中の人氣を此一方に引寄せ為めに花街や料理屋までが影響を蒙つたと云ふ浮かされ方は実に前古未曾有と云つても可なしである其未曾有の芝居熱は終に我々共にまでも感染して例の口先きがムツクとして治まらぬ処から何と一番此連中で役者評判記を作らうぢやないかと出来心で云つたが實になり此奴は奇妙な趣向だと追々賛成者の数が増して以上八人思つた存分四辺構はずの云ひ体三味八人八色の評判記弥々明日の紙上より読者にお目通りする事となつた然るに両座合して五十余名を悉く評すると云ふ事も出来ぬから仮りに両座から各十名づゝを拾ひ上げた其面々は即ち左の如しである

榮座

台北座

瀧三郎 雀之丞 竹三郎 駒右衛門

駒之丞 彦三郎 扇三郎 多賀之丞

百々蔵 吉十郎 三勝 卯多三郎

岡之助 五郎 雷花 のし蔵

扇平 我久蔵 八百七 瀧之助

以上二十名を毎日一人づゝ次第不同に引張り出して八方から批評するので借其評者は何れも読者とお馴染の悪まれもの之れも罪障懺悔の為め爰に名前を掲げて置く

梅の家 神州 百文字屋 九老人

笹の家 黙庵 手爾波丸 眼兵衛

処が此内百文字屋は近來まで病氣の為め入院して居られたのでまだ充分見ない後(ママ)者もあるから今度丈けは除

いて呉れとの事であつたのを無理に引張出したので又梅の家は今度に限り赤面役を務めるとの事であるから其為此処に断つて置く先づは明日より評判記の始り

明治三十六年(一九〇三)一月二十二日

●台北役者評判記(二)

嵐彦三郎

十字館以来お馴染の岡島屋今では栄座で色立役の人気者先づ評判記の書出しに此処から願ひ升

(九老人) 色立役としては色気乏しく、心棒立役にしては軽し、先づ適り役は帯屋の長右衛門、研屋才一郎と云ふあたりでふりませう、左れば先達ての三浦の助杯は善く出来ました、兎に角旅役者としては重宝な仁です、前髪ものや女形杯はとても柄にはふりません、台詞の言ひ廻しに何役を勤めても少しも変化の無いは大いなる欠点でふりませう(黙庵) 嫌だ、前世からの仇同士でもありやすめエが、此仁は性得虫が好きやせん、社杯物杯と来た日にやア全で形なした、気品と云ふものが皆無で、其野卑な事嘔吐が出そうな、世話物は稍見られるが、是逆も括りのない口跡と気障な目附と熱心でない芸の仕口で滅茶くサ、虫が好きかねば深くは申やせん

(神州) 峠は見えたり、麓も見えたり、高からざる山に登るが如し、而かも岐嶮ある事なく、而かも景勝ある事なし、優は力なき手無し角力なり、

(百文字屋) 髪結綱五郎や古手屋八郎兵衛、極く世話物の色立役と云ふ処が丈の自らも許して居る処ならんが、全体に色気が乏しいから折角大阪生粋の軽い台詞も左程に引立たず、仕草も可成演る方であるがホンの見学聞学と云ふ風で、自然と情に這入つて来ると云ふ垢抜けが見えぬから何と無く喰ひ足らぬ心地す、見た処では綱五郎よりも八

郎兵衛の方が見優りがしました、左れば世話の色立役でも余り弱い方より少々強い方が適つて居る様です、併し心棒立役と迄は受合れぬ、何を演しても目前が変らぬからツイ飽きく〜とします、イヤに口を尖らせて餅でも喉につまらせた様な目附をするのは甚だ不景気です、

(眼兵衛) 剥でも剥きこたへのせぬ眼を厭に剥き出し、調子外れの痴呆声張あけて、細長い手足を踏張り、変な形をする丈は止てほしい、宛然癡狂人の相格と来るからネ、決して旨いとは云はぬが何を演ても夫れ相応にこなして一寸見られる処もあれど、例の癡狂人の相格で薩張芝居をだいたい無しにして仕舞から、チト格好と云ふ事に注意して、舞台を粗末にせぬ様にすれば、万更捨た者では無からう、

(手爾波) 見るからに書出し顔で大向ふ受のする役者、殊に是でも当らぬか、是でも当らぬか、と見せ附ける風あるは却つて見巧者受に妙ならず、最少し洗味を加味して当場を減らしたらよからう、併し何をさせても器用な丈は流石田舎廻りで牛耳を執つた腕前、感す〜

(笹の家) 優は見れば見る程厭気のさすは何う云ふもの、其癖人気は豪いものださうですよ、尤も後家さん方ださうです、芸風杯は評の限で有ません

(梅の家) 十字館時代には相応に見られ、随分提灯持を仕てやつた事もあつたが、栄座へ入つてからは舞台負がしてサツパリ物に成らず、義理にも褒められない、併し連中からも大分不印の評が出たから悪まれ口は大概にして措く、兎に角に柄に無い社杯物は廃めた〜、元来寸延びの不恰好、トテモ品のよい役などは駄目、世話物の絆纏着でも出して居さへすれば間違なし、左りとして厭らしいキナ臭い仕打は鼻に附くがネ、

明日は阪東竹三郎

明治三十六年(一九〇三)一月二十三日

●台北役者評判記(三)

坂東竹三郎

是も彦三郎以前からのお馴染台北座第一の花方役者殊に乱舞が大の名人確かりと評判を頼みます

(梅の家) 此れ芝居の虫、呆れ返へる程達者な腕前去年油坊主を見せた時は梅の家確かに瀧之助の忠盛を遣つたと見た、エライ奴、若し物好きが台北の劇場史を書くなり、竹三郎が来てから芝居らしくなつたと言なければ成るまじ、此功績と達者との愛でイカに不公平と言はれやうと今回は憎まれ口は言はぬ、然し此頃ドウ考へたか本蔵だの大須賀だの老役を演るが悪い量見、己れは達者で何でも出ると無暗に買つて出るのが、但しは又他から振附られるのか、何れにしても悪い、

(笹の家) 優には古いお馴染(台北で)です、小手利き役者としては確かに他に比類ないと言つても過言で無いと思ふ、新来の仲間もこれ程の腕は無いと思つて居つたに違ひあるまじ、折角自重して芸道に注意かんじん、

(手爾波) 厭味といふものは頭の螺旋から足の爪先まで無い役者なれど、口跡は入歯の為か咽喉の奥から出て来るやうで、聞くからにオホンと一ツ痰が取つてやりたい気がする、殊に本業の足涉りは乱舞の力が与かつて居る故か、男はちいさいが舞台が大きい、又品がある処は台北中で卯多三郎の上に出るとも下へは降らぬ、并して凡てが對手次第で雷二郎と顔を合すれば雷次郎丈の技を演し瀧之助と顔を合すれば瀧之助丈の技をする、誰と顔を合せても場を仕活す処は、まだ何処にどんな虫が寝て居るか分らぬ、

(神州) 春の山を見るが如し、時に春の海を見るが如き芸風あり、裕々として迫らざるは優の特色なるべし、猶ほ

武道の達人の如きか、直接人物の価値を左右するに非ざるも、確かに人の畏敬を受く

(百文字屋) 寸と調子に不足が有ませうが眼と思入れと格好とは実に有り難い程です、元より座頭と云ふ質では有ませんが、立役殊に心棒立役、殊に浪人人物に扮しましてはスツカリ手に入つたものです、トコトンがある処から時々色立役に扮しますが、総体に堅過ぎるの嫌ひが有ますから、伊左衛門や忠兵衛などよりも、佐野源左衛門や寺子屋の源藏杯が遙かに上出来でした、丈に就いては去春頃屢々評した事がありましたから爰には詳細云ひませぬ、兎に角台湾現時の芝居では、ドーでも庵外へ据ゑなければなりません、

(黙庵) 是が大概な役者であつて御覧じろ、彼の口跡で彼の小さな背で、そりや逆も見られた物じやアが有せん、其処は竹ちやん芸で持やす、唯訳もなく当て場斗りをワツ〜と騒ぎ立てずに、細かに気を附けて此人の芸を見さつし、手一本の置所に迄気を注げて演つてる、余り人の目立たぬ処まで芸を演て居やす、落附思ひ入れ共充分で、眼の配り台辞廻しも中々甘い、絶句しないのは名物で間が抜ける様な事は些ともが有せん、意気込の仕打、腹芸も能く利いて眼玉は充分、先づ芸の上に着いては我輩は大した非難は無い、只喰足らぬは背の小さいのと彼の口跡で、実に引立ないで情けなうござ、役に依つては大分數があるので見栄えがない、ボケやつしに甘だれ口調がチヨイとが有す、是文が惜いとこ、兎まれ台北では矢ッ張第一流に在りだ、イヨ竹ちやん〜、

(九老人) 今まで演つた中で悪いと云ふのは先づ一分通り他は皆上出来と申ます、殊に心棒立役に至りましたは、世間既に定評が有ますから殊更に申すまい、強つて穴を突けば、丈には致方の無い事ですが、調子は上ズリの調子で、齒に物云ひがある故か、心棒立役の長台辞になると何となくダレが来るのと、始終立居に右の肩に悪い癖があつて、殊に出這入には能く目立ちます、先づ之れ位のものでせう、評者の目では、丈にしては煙草盆を持つて居る世話物の立役は自分にも演難くからうと思はれます、油坊主で上手で四ツ這に成つての左り目えなどは、未だに目

に着いて居ります、総体は格好の役者で、夫れ丈け腹にもあれば台湾あたりへ来る役者では無いませぬ
 (眼兵衛) 借も褒たりなく、七人総掛の総褒め、殊に赤面の役廻りである梅の家までが褒ちきるとは言語道断 併ながら其褒めはホンのしんみりとしたた役にて、大目日杯はから駄目、総体に派出な処が有ませぬ、御自慢の眼玉も余り飛出し過ぎてから、物によつては能くないです、併し大体に於て連中の説には大賛成くどくは云ひます
 まい

明日は中村吉十郎

明治三十六年(一九〇三)一月二十四日

●台北役者評判記(四)

中村吉十郎

台北梨園の早梅一枝また漸く廿才と云つても此道ではホンの坊ちお手柔らかに御評判を願ひます

(手爾波) 小刀細工的の動作をせず凡てが鷹揚で、そして舞台怯をせぬ処、どうしても大歌舞伎的の代呂物だ、殊に涼やかな両眼愛嬌があつて、媚めかしい処に凛々しい処もある、併し場合にもよるが若女形になつた時に口を余り歪める丈けは廃した方がよからう、又一ツはリウマチの為でもあらうが小手を利かさぬ処、僕は却つて歓迎する、菓物でも早う熟むのは虫色みだからオツトリ修業して晩成を期するがよからう

(神州) 如何にも役者の子なるべし、大なる蓄なり霜雪の害無くんば、末は大輪なるべし、但し恐らく貧乏人の庭のものなるべし、色も香もこれまでなるべし

(百文字屋) 目立つ程のデポチンではあるが、年の若い故で顔が艶々して居る処へ、白粉附きが至極宜しいから、震

ひつく程奇麗な事く、調子も悪いと云ふ方ではなく、舞台も瀧三郎とは違ひコセツカズノンビリとして中々の大舞台です、仕草も可なり、曾我の禪師坊では確かに泣かせました、扇屋の敦盛も結構、庵室の玉織姫も成つて居ました、由木右馬之助でツ、コロバシの佛が伺はれました、先づ是まで評者の見た処では不難でしたがどうか是から先き、アラレも無い処を出さねばよいが

(梅の家) 奇麗は実に奇麗だ、梅の家は赤面の役廻りだが、先づつて台北梨園の花と褒めて置く、今迄のところでは先づツ、がなく済んで居るが、段々出し物に困つて来たらドーなるやら、余計な事だが心配なものさ、早く何でもイーから舞つて貰ひたい、若し是れが出来なけりや、今の内に戻つて修業が肝要さ

(眼兵衛) 処が吉坊ン蘭平を出したのさ、内地で充分叩き込んで来たから、是非演らして呉れと自分から買つて出たとの事、成程演ります哩、実は何うかと案じて居たが却々足渉なども旨いものさ、何しろ年は若し奇麗で腕も利くから人氣の有るのも当然です、が吉坊ン自分は覚えが善いからとて他の役者が覚えが悪くてトチツたりするとき、癩癩を起す杯は頗る宜しくない、団仔の内は物覚えの善いものさ、温やかな芸風にも似合ない、斯んな事が若し増長するとモー先きが止つて了います何しろ芝居を演る気で居ては駄目、一挙一動見物の前で稽古するつもりで演らねば嘘ですぜ

(九老人) 梅鉢の若殿、小萩の敦盛、忠臣の力弥丈けを見たのでムいですが、何れも相当の出来でしたから、兎に角色立役と云ひ得られます、此の上は本蔵のボケやつし質店の大三郎、出入の五郎八、唐人殺の和泉の助などを演らして充分出来れば確かなもの、人氣は此上十倍、行末も見込がムいませう、兎に角女形を仕込であると云ふ処からは、屹度見られるに違ひないと思ひます

(笹の家) 僅か甘才の若者だもの、芸のかれて居る筈はなし、併し僕は優の厭味の無き芸風腕の達者な処、ズンと氣

に入りました、悪い事は言はぬ、早く東京にでも登り勉強なされ、まだ、

(黙庵) 大変な人気じやさうなが成程演りやすなア年齢の割にですよ、先づ台北中の役者で後來有望といふのは此人位らでがしようよ、第一顔が良い、眼玉も中々利きやすよ、夫れで口跡が中々出来ると云ふのだから剛勢でござあ、先づ一通り役者の資格を備へてると言つてようがすな、女形と立役と両方利いて、又其口跡を無理なしに遣ひ別ける処が旨いでござ、あれなれば後來悪もやりやせうよ、兎に角エライ、是非エライ、など、余り持上げると、大屯山まで昇り詰て仕舞にや淡水沖へドカ落なぞは、少々お気の毒ですから此位にして置う、芸は修業最中と見て兎かうは申やせん、只割合に余程良く出来ると申して置やせう、早く内地へ帰つて怠らず勉強が肝要でござ、こんな処でヤレ甘いとか、エライとか言のを嬉しがつて鼻に掛る様では到底駄目、台湾は鼻の落ち様が早いでござよ、色男

明日は中村駒右衛門

明治三十六年(一九〇三)一月二十五日

●台北役者評判記(五)

中村駒右衛門

本年とつて七十四と云ふ骨董品台湾には二度と見られぬ老俳優近う寄て御拝をとげられませう

(笹の家) 年寄の冷水と云ふが、当地までも渡つて若水汲まれしはズンと嬉しく思ひます、貫目といひ、仕草万端申分なし、是非近きうちに弓師藤四郎でも見せて貰ひたい、老体折角自愛せよ。

(百文屋字) 何しろ年の割には元氣盛んなもの、年配に叶つたものを演せて置けば間違は無からう、何でも昔は利口な大部屋役者と見た目は違ふまい

(九老人) 台湾へ来て定めて御満足でせう、年の割にはお達者な事でございます、芸の善悪は連中の若手方に譲りまして、老人は同情相憐むといふ処で黙つて置きませう。

(黙庵) 何しろ年齢が七十四と云ふのだから驚きやす、能く台湾まで来たものでがすよ、此人は三四年前であつたらう、大阪で一生のお名残を演つた事があると覚えてる、其時は早天王寺か何処か其辺へ隠居して居つたのであるが、再びお名残狂言の爲に出て道頓堀で花を咲かせた、其時代我輩今程芝居狂で無かつた上に大阪に居なかつたので、何を演つたか能く覚えては居やせんが、其人ならば其時の新聞の評は余程良かった様に頭に残つて居る、夫は大阪でも有名なものでござす、此人も矢張り夫であらう、顔や口跡は抜にして、芸は仕口が今とは違ふ、我輩などは所謂三十年も前の芝居を見た事があせんから、昔と今を較べる事は出来やせん、只こんな老人株によつて其一端を窺ふ丈でござす、昔の演り口と今とは多少違つて居ると思ふ、此人の芸を氣を注げて見ると、昔は成程あゝいふ処は彼したのかと頷かる、点が仄見えるのじや、一寸驚く仕打でも態とならずに仰山らしくと云ふ様にサ、長くなるので此辺で措くが、矢張り昔取つた杵柄、爺さん甘いと申やす。

(梅の家) 老功のお爺さん悪口の限にあらず。

(手爾波) 麒麟は老いても骨相駕馬の比にあらず、駿馬の骨尚ほスツプにするの味を存す、七十の老翁其手を欺く事を得ざるも、慥かに杵欄の痕跡を印して舞台落がせず、只爰は斯うして彼あして力むる処、形態に十分あらはし得ざるのみ。

(眼兵衛) 半死の老爺、尚ほ且此熱心あり、若手役者の善い手本です、腕も却々馬鹿にはならぬが、惜むらくは他の役者と科の演り方に就いて其趣きを異にする点であるが、是が骨董の骨董たる処、錦の如く花の如くなる若手揃ひの中に、一株の衰柳、我は唯其配合の妙を称するのみ、技芸は評する丈けが野暮であらう。

(神州) 古風な役者なり、手堅き老舗なり、売品は店頭よりも土蔵の裡に仕舞あり、古渡り更紗は此家に於て確かなりとの評あり

明日は実川百々藏

× × × × × × × ×

× × × × × × × ×

飛入り評

好劇翁

若い役者を褒める杯は以ての外である併し八人の評者は当地の役者を比較的批評して居るのだから此処でほめられたからとて夫れで満足することは出来ぬのである成る程吉十郎は品格と云ひ芸風と云ひ末たのもしき処がある殊に蘭平の大役を難なく演じ去つたる手腕は翁が確に見届けた併し精細に批評すれば足埒にも曰くあり台詞廻も未だ熟せず気合も未だ乗らず女形となりても外輪に歩き而も腰元の衣装に女郎の衣装がましきものを用ひる杯は沙汰の限りである云はゞ丈の技芸はまだ幼稚である疵だらけである斯く疵だらけではあるが鶏ではなく全く鶴の雛らしい此分にて勉強したならば立派な歌舞伎役者になるであらうけれども神童は往々にして伸びそこなうので若い時に巧者な役者に限つて後には大根となるのが多い是から大歌舞伎の立派な役者になるには第一に学問が必要である地方と時代とを研究し古今の言語風俗習慣を窮め其の扮せんとする人物を精神的に呑み込むやうになるには容易の事ではない其れも本人の勉強次第であるから一寸とほめられたに満足せぬやうにせねばならぬ斯くむづかしき註文をするのは余り酷であると云ふ人もあらう又当人もむつとするであらうが丈を渡俳優で終らせたくない翁の寸志後來望みあるものとしての翁の小言、ありがたく受くると否とは丈の勝手たるべし

明治三十六年（一九〇三）一月二十七日

●台北役者評判記（六）

実川百々蔵

今春から瀧三郎一派と共に榮座へ面出した若手俳優の利き者サア〜どつさり御好評を願ひ升

（神州）商売人なり、去れど仕人物なり、材料悪しく珍重すべきに非ず、手堅しと云はんより、値の安きを以て需用者多からんか。

（黙庵）是も中々使へる役者だ、口跡顔共先づよし背の低いのはどうしても損でござ、芸は取立て、良いと賞むる処はないが、舞台を神妙に勤め、何を演せても相応に演つて除けるは感心でござ。

（百文字屋）まだ〜真個の芝居をする役者でもありませんから、取立て評をする程でも有ますまい

（手爾波）芸中木賊の如き節ありてのびやかならざれど、寧ろ葱の如く節なきには勝れり、眼配りと口跡は此優の長所にて、又常に舞台に気を抜かさじと勤むる振あり〜と見えて、譬へば大勢の諸士に交つても、我役ならぬ所まで要所〜と思ふ処には、キツト耳を敬て眼を聳かす等、芸に笑を入れるは感心〜。

（梅の家）無人芝居の榮座に居るので今度は十人役者仲間に引出され、誠に仕合せな男 若し台北座に居つたら瀧升だの鶴三郎だの、此男より腕の確かなのは沢山に有るから、トテもお鉢は廻ぬ〜然し榮座の駒太郎梅二以下のペイ〜連に較ぶれば、まだ悪い僻（ママ）が高じて居ない丈け勝かも知れんけれども大概先の山は見えてる、是から延びた処で寸尺は知れたものだ、況てアンな芝居に居つた日には、到底矢ツ張ペイ〜たるを免れやせんぜ

（笹の家）優はまことに気合のよき芸風だが、まだ〜得心できぬ、四五年勉強の後お目に掛るべし

(眼兵衛) チヨイと気持のよい役者で、万事に注意をして居るから余り穴もありませんが技はまだ修業であらう、気の毒なのは眼兵衛とトンくで少々チンコと来て居るので、凡てが引立たぬ事です

(九老人) 先づ大部屋の諸士頭と云ふ図です、序の赤垣などは成つて居るの居ないと云ふ論は無いませぬ、道三郎姉輪などもカラ出来ては居りませぬ、まだく名だゝる役を勤める時でなく、端敵でも勤めて前向を取るのが得で無いしやう、左れど梅二輩のやうに舞台から場をギロく眺めると云ふ様なキタナイ事は無く、舞台上に車輪などは極結構な事です

明日は阪東のし蔵

明治三十六年(一九〇三)一月二十八日

●台北役者評判記(七)

阪東のし蔵

是も当春以来の新顔まだお馴染は浅くとも後進引立の思召を以て御最良の御高評をお頼み申す

(笹の家) 優はたしかに江戸ツ子のやうに思ふ、気合のよさ、口跡などの気味よき加減うれし、併し腕は尚一息き、勉強がかんじん。

(九老人) 如何に化けても端敵といふ処でムります夫れも時代ではなく、世話の端敵が極仁に嵌つて居ります、台湾斗りでは有ません内地のアラ物の中に雑つても相応に此穴なれば勤まります、まだく名前の如くのしが利きますから、まごくして居る時では無いませぬ。

(手爾波) 博徒の乾兒、悪棍の手下位が丈の嵌り役に、オツチリした事は到底出来ず、左れどタンカの切れるのと、

口跡も調子前も骨格もよい役者なれば、これから勉強次第にて、或いは大根といふ肩書を脱するやも知れず。

(梅の家) 台北でタンカの切れる役者は此男ばかり然し芸はまだく、修業すれば屹度物に成るとはヒイキ筋の保証、兎に角寸の定まつて居ないだけが能いところかネ、是も台湾に居ては心細い事く

(神州) 生焼のお薩摩芋、ゴシくする処あり、新兵の行列、足並の揃はぬ処あり、土人の腕車か、ガタピシヤーで乗者を苦ましむ甚し。

(黙庵) 気味のよい役者ぢや、背格好、顔付、口跡共能く揃つて先づ申分なし、只口跡が少し早過ぎて落附かないのは仕方がねエ、芸はまだくだ、貫目と云ふものが更にない、騒々しい尻まくりの役などが適り役だ、東京辺りで皮肉な芸を一修業さつし、良くなるべエ。

(百文字屋) 大部屋の諸士頭が相応の処、まだく評にかゝる処ではありませんが、榮座の百々蔵よりは見優りがあります。

(眼兵衛) 百々蔵とのし蔵は兩座の好一对です、併し其長所は各々異なつて居る、百々蔵は世話よりも社杯の方が良く、のし蔵は世話一本である、而して其芸風は若い故か少しも落附かずソワくして居るけれど、何となく生々し、肌合の小気味のよい処がある。

明日は中村駒之丞

明治三十六年(一九〇三)一月二十九日

●台北役者評判記(八)

中村駒之丞

栄座開業以来お馴染の若女形同座の花として人気沢山の評判者トツサリ御評判をお頼み申升

(百文字屋) 釜をどうだの斯うだのと評者へ連中からの悪口は全く以てすが、兎に角評者は初会惚の体です、だから鼻肩目だとの岡から声が掛りまじやうが、丈が何うやらした時に、千両と云ひたい色気があります、全くあるです、何処かと問はれると答に窮しますが、ソコが初会惚の初会惚たる所以で、何でも僕が恍惚となつた辺りでしやう勿論恐かなさうな眼つきの、どちらかと云へば四角張つて居る方の丈の顔でも無ければ、ヤ、桃を含んで居る様な丈の調子でもなく、始終手と首とがナンバに成つて居る丈の身振でもない、何でも其ナンバを出す辺りで、ニツとする時の惚々とする滴れさうな情であらう、全体此色気が女形殊に若女形には最も無ければならぬ要素でありながら中々得易からざるの品物である、特に此要素を有つて居る丈の、今少し身振に修業する処があれば屹度出世を請合ます。

(梅の家) トコトンが無いと見えて、クドキは何時も同じ手だ、此間の小浪など見られた物で無かつた、台北座の瀧樞位の格だが無人芝居の栄座故に案内能い役が附くが仕合せ、否当人相当の入れられませうを演つて居れば、悪口を言はれんで其方が仕合せかも知れん、先づ嫌な癖を直す事から稽古した、まだ。

(眼兵衛) 良い若女形でな、コセ附いてチツト下卑ッばいから、縫の物より襟の掛つた世話の娘なぞが適りでせう、黒瞳の小さいギロ〜とする厭な眼元に、どうかする時に無量の情がある、是れが此丈の命で、又夫れが下卑ッばい処なのです、チトのんびりと大きく成る稽古をせんと末が案じられます、特に注意して遣りたいのは、向ッ歯が一本抜けて居る事で、是が非常の眼障りになつてならぬ、少し艦艸通ひを止めて養齒をするがよい、商売の元入れだ。

(手爾波) 女立役として仕打の細かく、気転の利く役者なれば、鏡山のおはつ、杉酒屋のおみわ、法界坊のおくみ等は向くべきも、照天姫、八重垣姫等には不向なるべし、又滝夜叉の如き、鬼神のお松、高橋お伝、弁天小僧、八大伝の毛野等には殊に当て適りて、雀之丞にも立優るべし、兎に角是れから勉強にて、前途有望。

(九老人) 女形の修業よりも、立役の方却つて宜しからんかの様に見受られます、又何となく末が止まりさうな
 気持がしますが、此れきりに成りましてはトント仕方もムりますまい、夫れとも女形に成立つ量見なれば、土橋の
 歌方姫の穴専門だらうと思はれます。

(神州) 砂糖なり、口取なり、白砂糖なり割が利かず、キントンなり喰ふに堪へず、品あれば飾とはなるべし、手を
 触るべからず、直ちに砕くるの思ひあり

(黙庵) 此人も当時人氣もの、一人ですがすな、ナニ此人と魚金の目高を夫婦にしたら何うですつてかいハ、、、
 ソンなに傍から交つかへしてはいきやせん、併し役者としての眼玉ですがすよ、あれで女形の舞台面の良い事と来たら
 無いですがすな、矢張役者は女形でも眼玉がほしいですが、口跡はお気の毒ながら甚不感心、がたなぞは丸で色消し
 だ実(じつ)に声ばかりは詮方ないとしても何とか出来ぬものか、惜しうがすよ、芸は熱心で身上だけにこなして中々見られ
 る、其上舞台を等閑にせず(なほざり)に上手の演るのを気を付けて見て居る処は感心しやした、年齢だけにお若いのは仕方があ
 せん、今(いま)から、一修業(ひとしゆげふ)さつし、望みがある。

(笹の家) 優(う)の様(よう)に役々(やくやく)おどつて居ては氣(き)に入りませぬ、目(め)の肥(こ)えて居る人(ひと)から見れば、田舎芝居(いなかしばゐ)のお山(やま)と称(しょう)するよ
 り外(ほか)なし、是(これ)から人形振(にんぎょうぶり)の稽古(けいこ)をして、人形女形(にんぎょうにんがた)の名声(めいせい)を博(はく)するやう、只管(ひたすら)勧告(くわんこく)します

明日は中村扇三郎

明治三十六年(一九〇三)一月三十日

●台北役者評判記(九)

中村扇三郎

また漸く一ヶ月計りのお馴染ながら当時台北座での若女形の立者サア御評判は如何でげすかな

(九老人) マア女形でムりませう、色気も無いではありませんが、全く附け色気といふ処です、だから何となく乏しいやうです、全体品がありませんから、どうも淋しくて仕様がムいませう、同座では儘かに若女形に据ゑてあるのでもいませうが、見た処ではツメの方が……と申たいですが、之れも……中々六ヶ敷い役者です、併し決して下手だとは申ません、仁にある処は先づ十種香の濡衣と云ふあたりでムいませう。

(笹の家) 優の芸風おつとりとした処中々よろし、併し気合の悪いには恐れているよ、此あひだ六段目のお軽で、勘平より女房までと言はれ、傍にかけよる時などの不味さ加減は無お婿さまも心配のことだらうと思ひます、注意かんじん。

(百文字屋) 台北座では花方の若女形です、振も格好も出来ては居りますが、情に乏しいからお顔のやうに何だか薄つべらな心持がします、台詞も仕草も何処か間がぬけて居て、襦袢一枚着忘れたと云ふ塩梅です、評者はまだ評する程も見て居りませんから、是れ位に止めて置ませう。

(手爾波) 仕草が大人しくて、何処やらに引立たざる処あれど、少しも胡麻化しの手なきは本筋の勉強せし故なるべし、故に一寸眼には小手が利かざるやうに見ゆれど、いつまで見ても見飽かず。

(黙庵) 呑ツたれた口跡と、淋しげな顔附は甚だ以て引立たず、逆も婀娜っぽい役は柄があせん、水の滴る様な惚れぐする様な、賑やかな派手な訳にやアいきやせん、が万事に派出でない代りにしつとりとして居やす、生真似目な神妙に演る役は誠に能く適りやす、稍落附もあつて品も可なり芸も熱心にやるので、上々とは云はれぬが、一通り見られやす、騒々しく勿ね返る芸よりは、しつとりとして押し通す方が此人には良いですが、今一息の勉強。

(神州) 海鼠か、イヤ海鼠程の乙な処なし、彼岸桜なるべし、町中の彼岸桜なり。

(眼兵衛) 馬鹿に貧相な淋しい顔附で、口跡も又顔とトン／＼で頗る損な役者です、だから矢張り模様が不適當です、評者が見た中では壺坂のお里が此地へ来て以来第一の出来だらうと思ひます、無論適り役であつたからでしやう、芸が叮嚀で落附いた処此優の長所で、此後とも非常に引立つと云ふ事は無くとも、悪落の来る様な事は有ますまい

(梅の家) まだ能く解らないが悪くは無さうな、チイと顔の拵へが不味さうだがどうかネ、其れにモウ少し気合を呑込んで貰ひたし、何となく相手が演難くさうだ。

明日は中村岡之助

明治三十六年(一九〇三)二月一日

●台北役者評判記(十)

中村岡之助

榮座の連中では此文が一番当地への古参殊に近來メツキり売出した人気役者サア頼み申します

(九老人) 十字館台北座時代とは打つて交つて、何処で修業をせられたやら、榮座へ出てからメツキり器量を上げられました、其上見る度／＼に上達して居るのは優斗りで△います、此の圖を外さず修業すれば出世は受合ひです、駒太郎など、並んで居りますが、決して同人如き末の止つた代物ではなく、ズン／＼延びる処が△います、成るべく堅ひものでなく、軟らかな処に心を止めて修業せらるべき事です。

(神州) 固くなりし餅なり、齒も立つ能はず、但し感心に徽を生ぜず、嚼み占めて味ひなきはチャン米と見えたり。

(手爾波) 滅切り修業の功あらはれたり、左れど女形だけは(端役はともかく)思ひ止まり、優男町人の方へ凝つて更らに勉強すれば、聴て右八、忠兵衛、伝兵衛、治平、才三等の役もつくべし。

(笹の家) 優は度々言つたこともあるが、女形として芸風将来に見込あるたち故、名人の門下をたより一奮発すれば、確かに歌舞技(ママ)役者として立派になれます、此土地などであまり浮名を流さぬやう又チヨコくした芸を見習はず、京に登つて得度する事かん要く。

(梅の家) 十字館に顔を晒して居た為に下の方へ廻されて居るが、瀧三郎等と一所に来たら、確かに駒之丞の上に座るに違ひなし、其気の毒さに免じて、今回の評判記には悪口は申すまじ。

(眼兵衛) 一寸面も奇麗なり、技も何を為せても器用に分相應に演つて退けるので、可成人気がある而して其人気が舞台の上よりも、夫れ以外の技の方が人氣があるとは情ない事です、十字館時代には女形をしてもフツクラと可愛らしい面であつたが、近來は滅茶に頬がコケて貧相な事此上なし、之れも舞台以外の技の為では有まいか、之れから漸く芽出しの時代であるのに、今の不品行では到底駄目です、之れは芸評以外の様ではあるが、将来に見込のある優と思へばこそ、意外な苦口を利くのである、兎に角外へ心を散らさず、芸三昧に入つて修業すれば、まだく延るに違ひはない。(百文字屋) 暫く見ない中になかく上達しました此間若旦那助三郎丈けを見ましたが、住吉の会あたり甘くボヤケに成り済して居ました、まだ何処となく堅い処がありますが、夫れは垢抜けの足らぬ処、今少し碎けた処に意を注げて修業が肝腎です、此畑は出世畑と申すまじ。

(黙庵) 修業最中と思へば悪口も出やせん、十字館で演つて居つた時より、余程芸が上達したのは頼もしいこと、此人は余程伸びる質で万事氣用だ、何をさせても相應に演つて除けるから誠に感心、今の内に良い師匠を取つて勉強したら一廉のものになるでがす、娘役に品がないのは頬と口元の關係ではは仕方ない、立役を勉強さつし、新聞の三種を余り作らぬ様に注意して置かう。

明日は臺家薔花

(ひおき・たかゆき 情報コミュニケーション学部准教授)